

幸福のはさみ

小川未明

青空文庫

正吉しょうきちは、まだお母かあさんが、ほんとうに死しんでしまわれたとは、どうしても信しんじるこ
とができませんでした。

しかし、お母かあさんが、もうこの家いえにいられなくなつてから幾いくにち日もたちました。正しょう
吉きちはその間あいだ、毎まいにち日ひお母かあさんのことを思い出だしては、さびしい日ひを送おくりました。彼かれは子こ
供もいこう心こころにも、もうお母かあさんは死しんでしまわれたので、けつしてふたたび帰かえつてこられない
と思おもいながら、やはりまったく死しんでしまわれたとは、どうしても、思おもうことができな
つたのです。あのやさしいお母かあさんが、この世界せかいのどこにも、まったくいられないと信しん
じたら、そして、もうどんなことをしても、二度どと見みることができないと信しんじたら、彼かれは、
悲かなしさのあまり、胸むねが張はり裂さけてしまうからでありました。

お母かあさんが、じつと正しょう吉きちを見みつめられるときは、いつも、その真まつ黒くろな目めの中なかに、
涙なみだがたたえられていたのを、正しょう吉きちは忘わすれることができませんでした。

お母かあさんがいられなくなつてから、正しょう吉きちは、せめてお母かあさんの面おも影かげを思おもい出だすこ
とを楽たのしみにしていました。空そらを吹ふく寒さむい風かぜも、また、窓まどを打うつ落おち葉はの音おとも、それをば
さまたげるものはなかつたのです。

正吉しょうきちは、夜よるになつて、使つかいにやられるのを恐おそろしがつていました。なぜなら、このごろ、父親ちちおやは暗くらくなつてから、酒さけが足りたないといつては、町まちの酒屋さかやまで酒さけを買いかに、正吉しょうきちをやつたからであります。

「なあ正吉しょうきち、酒さけを買いかにいつてこい。」

夜よるになると、はたして、父親ちちおやはいいました。月つきもない暗くらい晩ばんでありました。星ほしの光ひかりが降ふるように、青あお黒くろい空そらに輝かがやいていました。そして、風かぜが吹ふいて、落おち葉ばが田たの上うへを、カサカサ音おとをたてて飛とんでいました。

もし、こんなときにいやだといつたら、きつと、父親ちちおやは「意い気く地じなしめ。」といつて、しかつたであります。正吉しょうきちは、お母かあさんがおられたら、自分じぶんは、けつして、こんなさびしいめをみなくていいものと思おもいますと、目めの中なかに涙なみだがわいてきたのであります。が、

「なあ、正吉しょうきちは強つよいものな。いい子こだからいつてきてくれよ。」と、父親ちちおやは、後うしろ姿すがたを見送みおくりながら、いいました。

こう、父親ちちおやにやさしくいいかけられると、正吉しょうきちは、またなんとなく、父親ちちおやをあわれに思おもいました。そして自分じぶんたちは、いつまでもこんなにさびしい日ひを送おくらなければな

らないのだろうかと、悲しくなりました。

正吉は、とぼとぼと町の方をさして歩いてゆきました。このあたりはもう日が暮れると、まったく人通りは絶えてしまったのです。どの家も戸を締めてしまつて、わずかに、戸のすきまから、内部に点つている燈火の光が、寒い、さびしい外の闇の中に、幽かな光を送つているばかりでありました。

小さな、田舎町は、おなじように、早くから、どこの店も戸を締めてしまいました。

正吉は、平常、歩き慣れていましたので、一筋の道をたどつてゆきました。どこか遠くの方で、犬のなっている声が聞こえたのであります。ようやく、町に入ろうとしました。するとそこにお寺がありました。

寺の境内にはたくさんの木が植わつています。そして、いまは、いずれも黄色に真っ赤に、葉が色づいていました。しかし、それらは、夜でありますから、ただ音だけが聞こえるばかりで、はらはらと風の襲うたびに騒がしく散つていました。

正吉は、お寺の門前に、ただ一つ提燈をつけて、露店を出している人があるのを遠くからながめました。夏の夜や、縁日の晩などには、よくこの町にも露店が出ましたけれど、こんなに寒くなつてからは、出歩く人も少ないので、ああして露店を出して

も品物しなものを買うかものがないだろうにと、思おもわれたのでありました。

その提燈ちようちんの火ひは、紙かみがすすけているので、暗くらうございました。どんな人ひとがそこにすわっているのだろうと、正吉しょうきちは思おもいながら、だんだんと、その露天ろてんの方に近ちかづいてきました。風かぜに吹ふかれて、落おち葉はは、その火ひの周まわり圍わりに渦うず巻まいていました。しかし、すわっている人ひとは、じつとして動うごきませんでした。

正吉しょうきちは、一人ひとりの女おんなが、さびしそうに往おう来らいを見みつめてすわっているのを見みました。そして、提燈ちようちんのうす暗くらい火ひ影かげで、その顔かおを見みますと、恋こいしいお母かあさんに、まったくよく似にているのでありました。

その女おんなは、前まえにむしろを敷しいて、はさみをならべていました。そのはさみは、着物きものを縫ぬうときに入いり用ようのはさみでありました。

正吉しょうきちは、しばらく、その女おんなを見みつめてたたずみました。そして、見みれば見るほど、恋こいしいお母かあさんの顔かおによく似にていましたので、とうとう自じ分ぶんを忘わすれて、正吉しょうきちは「お母かあさん。」といつて、そのそばに、駆かけ寄よりました。

すると、その女おんなは、さびしく笑わらいました。そして、しつかりと正吉しょうきちを抱いだき寄よせました。

「私は、坊やお母さんじゃありません。その証拠に、私の頭の髪は、こんなに灰色がかつています。しかし私は、坊がさびしいのをよく知っています。私が、おまじないをしてあげる。もうこれから、お父さんは、けつして、こんな風の吹く暗い晩に、坊をお使になぞ出しはしないだろう……。」

こういつて、女の人は、前のむしろの上に載せてあつたはさみの中から、一つのはさみを取つて、自分のほおのあたりに垂れかかつた、髪の毛を二、三本切つて、それをば、正吉の持つていた徳利の中に入れて渡しました。そして、正吉の頭をなでながら、「お父さんが待つておいでなさるから、早く酒を買つて、家へお帰りなさい。気をつけて、転ばないようにおゆきよ。坊が帰るまで、私は店を出しています。」と、やさしくいつて、正吉の顔をのぞきました。正吉は、お母さんは髪の毛が、もつと黒かつたと思ひましたけれど、あまりその女の人がお母さんに似ているので、ただ悲しく、なつかしさで胸がいっぱいでありました。そして、その女の目の中がうるんで涙でいっぱいなのも、ほんとうにお母さんが自分を見るときとまつたく同じでありました。それですから、正吉も悲しくなつて、しくしくと泣き出しました。

すると、女は、正吉を前の方に、押し離すようにして、

「私にも、ちようど坊と同じぐらいの男の子がありますの。しかし、おとなで、さびしがりもせず、独りで私の帰るまでお留守居をしていますよ。坊やも、早くお家へ帰って、お父さんの手助けをしてあげなければなりません。」といいました。

正吉は、こう聞くと、やはり自分のお母さんではなかつたことを知りました。そして、泣くのをやめて、とぼとぼと、それから、酒を買いに酒屋の方へと歩いてゆきました。正吉が、徳利を下げて帰るときにも、女の人は、じつとすわっていました。正吉は、悲しさが胸にこみあげてきて、早く家へ帰って、また、死んだお母さんを思い出して、ぞんぶんに泣こうと道を駆け出したのであります。

父親は、正吉が、酒を買って帰るのを待っていました。そして、子供が、どんな悲しい思いにふけているかということも知らずに、徳利を受け取ると、さつそくその酒を盃に注いで飲みはじめました。

父親は、さもうまそうに舌打ちをして飲んでいましたが、にわかに盃を下に置いて、考え込みながら、

「不思議なこともあるものだ。この酒は梅の香いがする。この香いは、死んだ妻が髪の毛につけていた香油の香いそっくりだ。」と、独り言をして、死んだ正吉の母親を思

い出したように考え込みました。

父親のいうことを聞くと、正吉は、びつくりしました。彼は先刻、寺の前で見た女の人が、どうしてもお母さんにちがいないような気がして、考えにふけていたやさきでありましたから、このとき、彼は、あつたままを父親に話したのであります。そして、その女の人がおまじないに髪の毛をはさみで切つて徳利の中に入れてたこともすっかり話したのであります。その話を聞くと、父親は、いままでの酔いがすっかりさめてしまつたように、まじめな顔つきになりました。

「どれ、俺がいつてみてみよう。おまえは、家に留守をしているのだよ。」といつて、父親は急いで町の方へとゆきました。

父親は、星晴れのした空の下の、暗い道を歩いてゆきました。それは、正吉の通つたと同じ道でありました。落ち葉の空を飛ぶ音が聞こえます。木の枝の風に吹かれて鳴る音が聞こえています。このとき、父親は、はじめて、こんなさびしい道を子供をば使いにやつたことをかわいそうに思つて後悔しました。

そのとき、あちらに、暗い提燈の火が見えたのであります。それは、ちようど寺の門前であつて、まだ露店が出ているのでした。

こんなさびしい、人通りのない晩に、いまごろまで露店を出しているなんて不思議なことだと、父親は思いました。

「あすこに、その死んだ妻に似た女がすわっているのか。」と、父親は、胸のなかいいながら近づいてみました。すると、それは、いつのまに人が変わったものか、女の人でなくて、白髪のおじいさんが、じつとさびしい往來を見つめてすわっていました。

父親は、そのおじいさんの顔を見ると、びつくりしました。ずっと前に、この世から亡くなられた自分のお父さんに、その面ざしが似ているからでありました。

おじいさんは、黙って下を向いていました。正吉の父親は、その前に立って、はさみを見ながら、いろいろのことを思い出していました。

「おじいさん、このはさみをくださいまし。」と、父親はいいました。

すると、黙って下を向いていたおじいさんは顔を上げました。

「こう寒くなつては、どこの家でも冬着の仕度をせにやならん。このはさみを使った人は、みんなにしあわせがくるから、楽しみにしていなさい。」と、おじいさんはいいました。

正吉の父親は、自分は男で、着物を縫えないが、だれか人にたのんで、子供にだけなりと暖かい着物を着せてやりたいと思いました。父親は、ずっと以前に、この世か

ら亡くなられて、忘れかかっていた父親の顔を、おじいさんを見て、はつきりと思い出しました。

「おじいさんも、かぜをひかないようにお大事になさいまし。」と行って、父親は、子供が待つているだろうと思つて、急いで家へ帰りました。

明るる日の朝、あられが降つて、あたりはいっそうさびしくなりました。その日、思いがけなく、しばらくたよりのなかつた妹から手紙がきました。旅に出ていた妹が、帰つてくるといふ知らせでありました。

「正吉や、叔母さんが帰つてきなさるぞ。」と、父親はさびしがっている正吉に向かつていいました。

「叔母さんが帰つてきなさる？」と、正吉はびつくりしたように叫びました。

正吉は、四つか五つの時分に、たいへん自分をかわいがつてくれた叔母さんのあつたことを知つていました。たとえ、記憶にはほとんど残つていないにしろ、たえず心の中では慕わしく思つていたのでありました。

正吉の家は、急に晴れ晴れとしてきました。曇つた日に、雲間から日の光が射したように明るくなつてきました。そして叔母さんは、きつと土産物を正吉に持つてき

てくださるばかりでなく、
もうと思っおもたばかりでも、
父親ちちおやや、
正吉しょうきちの心こころは明あかるくなるのであります。
また帰かえってこられたら、正吉しょうきちに着物きものを縫ぬってくださいであ

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

初出：「婦人界 6巻11号」

1922（大正11）年11月

※表題は底本では、「幸福《こうふく》のはさみ」となっています。

※初出時の表題は「幸福の鋏」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幸福のはさみ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>